

エメ・セゼール『帰郷ノート』、内観と自立の過程

小松 正道

序

2007年1月15日、カリブ海に浮かぶフランス領マルティニーク島⁽¹⁾のフォー
ル・ド・フランス空港はその名をエメ・セゼール・マルティニーク国際空港
(Aéroport international Martinique Aimé Césaire) と改めた。エメ・セゼールは1913
年にマルティニーク島の北部の村に生まれた詩人、劇作家であり、また政治家
でもある。島民にパパ・セゼール (Père Césaire、あるいはクレオール語で Papa
Sézè) と親しみをこめて呼ばれる彼は93歳になっていた。セゼールは、島民に
どれほどの読者がいるかはともかく20世紀における偉大なフランス語詩人の
一人とって差し支えないだろう。また、フランス国民議会議員と首府フォー
ル・ド・フランス市長を第二次世界大戦後より半世紀にわたって務め、高度な
政治的判断により独立ではなくフランス共和国の一部としての自治を選択し現
在のマルティニーク島の地位を築いた政治家でもある。植民地主義と闘ったこ
の文人政治家の業績を文学と政治の領域で切り離して評価するのは不可能であ
るが、国際空港にその名が冠せられるというこの上ない世俗的栄光が存命の文
人政治家をどのように評価した結果、与えられた荣誉なのかは定かではない。

若きセゼールは奨学金を得て1931年にパリに渡り、1935年に高等師範学校
への入学を許されている。パリで知り合った黒人の学生たちと黒人文学運動を
始めたのもほぼ同時期のことである。1930年代の植民地帝国の首都パリにおい
て、植民地生まれの黒人学生であり、白人中心社会のエリートコースを進むこ
とを命ぜられた者にとっては、ただ熱心に学ぶだけでは不十分であり、疎外さ

れた自らの存在を確認し正当化し称えるための新しい文学が必要であった。1934年、セゼールはセネガル出身のレオポルド＝セダール・サンゴール、ギアヌ出身のレオン＝ゴントラン・ダマスらとともに『黒人学生』(*L'Étudiant Noir*)誌を刊行する。セゼールは1936年頃より『帰郷ノート』(*Cahier d'un retour au pays natal*)を書き始め、第二次世界大戦開戦直前の1939年8月、パリにて雑誌『ヴォロンテ』(*Volontés*)誌に長詩の第一稿を発表する。そして発表の数日後には、セゼールはヨーロッパに別れを告げマルティニーク島への帰郷の途に就いた。

戦時下におけるヴィシー政権の圧制と連合国による海上封鎖に見舞われたマルティニーク島で母校であるヴィクトル・シェルシェール高校の文学教師として働く傍らセゼールは妻シュザンヌヤルネ・メニルらと文芸誌『トロピック』(*Tropiques*)⁽²⁾を定期的に刊行し活発な文芸批評を行った。終戦を迎えるとセゼールはマルティニークの前途のためフランス共産党から立候補し、国民議会議員とフォル・ド・フランス市長に就任する。結局マルティニークには見向きもしない共産党とはハンガリー動乱を契機に決別するが、その後も自ら引退するまで半世紀にわたり職を勤め上げ⁽³⁾、その間にも詩作と戯曲の執筆を続けた。

代表作である『帰郷ノート』は1939年の第一稿に大幅な加筆と修正が加えられ、アンドレ・ブルトンの序文を付して1947年にボルダス社より出版された。さらに加筆・修正が加えられ1956年にブレザンス・アフリケーヌ社より出版されたのが決定版である。セゼールの詩作品の中でも群を抜いた長詩であり、一般的には「黒人としての自己意識」(*négritude*、ネグリテュード)の再獲得、ひいてはアフリカ回帰の詩として知られている。盟友サンゴールが後にセネガル共和国の初代大統領となり汎アフリカニズムを打ち出したとき、ネグリテュードはアフリカナショナリズムの基調をなす思想として結びつけられ、極めて人種主義的色彩の強いものとして知られることとなった。しかしながらアフリカ生まれのサンゴールにはサンゴールのネグリテュードがあり、奴隷制度によって300年前に現実のアフリカを奪われたマルティニーク人のセゼールにはセゼールのネグリテュードがあるのである。20世紀のマルティニーク黒人にとって、自身とアフリカという土地の間には大きな時間的、空間的断絶がある。だが、

少なくともセゼールはこの断絶を単純に埋めようと詩作をしたわけではない。むしろ、断絶を明らかにし違いを明確にすることこそが、自己の存在の証明となると考えたのではないか。彼にとってアフリカは先祖の故郷としてのアフリカであり、カリブ海人にとってはもはや約束された土地ではなく、不確かな集団的記憶として意識の中に存在する幻想のアフリカである。詩では帰郷すべき土地について語られているが、マルティニーク人が黒人としての自覚と誇りを取り戻すことと、現実のアフリカへの回帰は全く関係がない。そうではなく、故国を失い誇りを奪われた人々が、長い喪失の後に何を如何に創造し獲得していくべきかという模索の過程が謳われているのが『帰郷ノート』なのである。

『帰郷ノート』では韻文と散文が交錯し、アフリカやカリブ先住民の言語、あるいはラテン語に由来する新造語や一般的にはあまり馴染みのない学術的、医学的な専門用語が多用されている。たとえば詩の最後を飾る *verritition* という語はセゼールの造語であり、その意味や由来については、セゼール自身、ラテン語の動詞 *vertere* (回転する) から「回転」、「渦」を意味するとも、ラテン語の動詞 *verrere* (掃く) から「掃くこと」、「排除」を意味するとも、時期によって異なる説明をしており⁽⁴⁾、詩自体が定まらぬ意味のまま留まっているかのようである。このような言語の異化作用は、白人のものであったはずのフランス語をその正統な歴史から切り離し、自分たちの言葉として用いるための手段であるとともに、読者へは晦渋さをもたらしていることも確かである。

『帰郷ノート』は1956年の決定版以降の版にも詩節の相違が見られる。また、どの版においても節ごとに番号が振られているわけでもなく、章立てもされていないこの詩においてドミニク・コンブは、一般に批評家たちはこの詩を三つの部分すなわち、憎しみの段階、内観と幼年期の思い出の段階、そして人種的、社会的、政治的反抗の段階、に分けていると述べる⁽⁵⁾。一方で、これに対してコンブ自身は詩の中にある大きな二つの動きを示している。一つはマルティニーク島やその住民、白人による軽蔑の眼差しによって自らを疎外する黒人種への激しい非難、もう一つはネグリテュードを受け容れることによって支えられた積極的な反抗である。コンブによると、この「激しい非難」は詩の冒頭からほ

ば三分の二を占め、詩の残りの三分の一は「反抗とネグリテュード」とそれらの称揚が描かれているという。だが、どちらの分析も詩に明確な区切りを見出すには至っていない。

しかし『帰郷ノート』は自立のドラマという観点から三つの部分に分けることが可能である。第一部は第1節より第32節まで⁽⁶⁾で、そこでは島や島民の現況とそれに対する一人称「おれ」の強い憤り、そして義務感の芽生えが語られている。第二部は第33節より第109節までで、そこでは集合的意識の口を借りて語る数世紀にわたる受難の歴史とそれを自分のものとする内観の過程が語られている。第三部は第110節より最終節の第174節までとなり、そこでは内観の結果引き出された故郷喪失者たちのあるべき姿について語られている。

本論文はコンプの示唆を引き継ぎつつ、『帰郷ノート』を明確に三つの部分に分けることによって詩の一筋の流れを見出し、全体の姿を明らかにしようとするものである。

1. ある島の現状と「おれ」の憤り

第一部は冒頭第1節の「夜が明けると／失せやがれ、そうおれはあいつに言ったものだ […]」*« Au bout du petit matin… / Va-t-en, lui disais-je, […] »* (texte, p.9 以下同様) から第32節の「夜が明けると、かつての風が立つ、裏切られた忠実の、怠った確かな義務の風が、そしてヨーロッパのこのもうひとつの夜明け」*« Au bout du petit matin, le vent de jadis qui s'élève, des fidélités trahies, du devoir incertain qui se dérobe et cet autre petit matin d'Europe…»* (p.19) までである。なお詩の冒頭の *Au bout du petit matin* という句はこの第一部において20回、第二部に6回、第三部には1回使われている。また第一部にはマルティニーク島特有の小高い山であるモルヌ (*mome*) という語が12回現れることから、詩の中で明言されていないものの語られる島は詩人の故郷マルティニーク島であると読み取することは難くない⁽⁷⁾。

舞台はある島。一人称「おれ」が語り、語られる対象は俯瞰的な島からはじ

まり、次第に町や民衆の惨状、クリスマスの準備をする民家、さらには語り手の生家と思われる家の中へと焦点接近している。

les Antilles dynamitées d'alcool, échouées dans la boue de cette baie, dans la poussière de cette ville sinistrement échouées. (p.9)

アルコールで爆破され、この湾の泥の中に座礁し、不吉にもこの街の埃の中に座礁したアンティル諸島。

詩の中ではここで始めて島にアンティルという名前が与えられる。アンティル諸島は、それが内包しているはずの湾の泥の中、街の埃の中に座礁しているとされている。島の中に湾があり、街があるという包含関係が、湾の中、街の中に島があるというように逆転しているのである。ここでは現実の尺度に反して島は島自身の内部に惨めに体を縮めた存在として描かれているといえよう。

「爆破されたアンティル諸島」(les Antilles dynamitées) という言い回しはマルティニーク島のペレ山の噴火を想起させる。ペレ山は1902年に大噴火を起こし、当時の県庁所在地であったサン・ピエールを住民二名を残して壊滅させた。この噴火の際に火砕流の熱によってラム酒倉庫が爆発したというエピソードが残されているが、「アルコールで爆破され」(dynamitées d'alcool) という表現はこのエピソードを逆転させたものであろうか。同時にこの表現は島民がアルコールで身を持ち崩す⁽⁸⁾島民たちの姿をも示している。

このアルコールのほかにも島に関する描写では至るところに天然痘、かさぶた、海原の傷、レブラ、痒疹、蕁麻疹、横痃などといった病気のイメージが現れている。モルヌは「飢餓に晒され」、「マラリアに冒され」、太陽すらも「性病を病んでいる」のである。上掲の引用やこれら病気のイメージに、「かさぶた」「海原の傷」などといったカリブ海に浮かぶ小さな島を示す比喩も加わり、島の地理的な描写は矮小化された島民の精神性とパラレルになっている。語り手は島や島民を軽蔑や苛立ち、憎悪の眼差しで見ているといえよう。描写は島から島民へと移行する。

島民はといえば、無気力で不活性な状態が描かれている。

Et dans cette ville inerte, cette foule criarde si étonnamment passée à côté de son cri comme cette ville à côté de son mouvement, de son sens, sans inquiétude, à côté de son vrai cri, le seul qu'on eût voulu l'entendre crier parce qu'on le sent sien lui seul (p.10)

そしてこの無気力な街で、この騒々しい群衆は啞然とするほどその叫びの横を素通りしてしまう、その動きの、その意味の横を心穏やかに素通りし、その真の叫び、唯一自分のものであると感じられるが故に叫んでいることが聞こえて欲しかった唯一のものの横を素通りしてしまう

Dans cette ville inerte, cette étrange foule qui ne s'entasse pas, ne se mêle pas (p.11)

この無気力な街で、この奇妙な群衆はひしめき合わず混じり合わない

群衆の騒々しさはおよそ生産的なものではない。空虚さを埋めるための散漫な騒々しさのため、そこから群衆がひしめき合うことも混じり合うこともない。それどころか、「その動き」、「その意味」、「その真の叫び」といった大事なものを掻き消してしまうことになる。「啞然とするほど」という箇所での驚きの主体は、これら群衆を見ている語り手であろう。街のいずこからか生じ、群衆の騒々しさに掻き消される「動き」、「意味」、「真の叫び」はまた、語り手のものでもあったかもしれない。この一節には、群衆に対する語り手の憤りを感じとることができるだろう。

語り手の視線はさらに群衆からクリスマスを迎える民家へと移動する。クリスマスの準備に必要なのは不安を抱くことである、と語り手は言う。

Il avait l'agoraphobie, Noël. Ce qu'il lui fallait c'était toute une journée d'affairement, d'appréts, de cuisinages, de nettoyages, d'inquiétudes,

de-peur-que-ça-ne-suffise-pas,

de-peur-que-ça-ne-manque,

de-peur-qu'on-ne-s'embête, (p.15)

クリスマスは広場恐怖症だった。クリスマスに必要なだったのは、忙しさの、準備の、料理の、掃除の、不安の、まる一日

これでは－充分だとは－思え－ない－心配－の

何かが一足り一ない一のではないのか一と一心配一の
 みんなが一退屈するのでは一ないか一と一心配一の

労働力として植民地へ連れてこられた先祖たちは、「文明化」のためにキリスト教の恩恵に与り、独自の文化の根を絶たれた人たちである。そして今その子孫たちは、一年で最も重要な日を祝うために不安でいっぱいなのだ。「広場恐怖症」のクリスマスのために人々は決して収まることのない自らの不安を収めようと哀れにも必死に準備をしているのだ。そしてクリスマスの場面では満たされることのなかった不安から逃れるかのようにラム酒に酔った人々は次のようなミサ曲（『憐れみの賛歌』）を歌っている。

Alleluia / Kyrie eleison...leison...leison, / Christe eleison... leison... leison. (p.16)

ハレルヤ／主よ、哀れみたまえ…哀れみたまえ…哀れみたまえ／キリストよ、哀れみたまえ…哀れみたまえ…哀れみたまえ

酔いのせいであろう。歌は止まらないが、なおも不安に重く彷徨う(*Les chants ne s'arrêtent pas, mais ils roulent maintenant inquiets et lourds (p.16)*)。クリスマスに向けて不安で仕方がなかった人々にとって『憐れみの賛歌』は非常に皮肉で残酷であり、また悲しい。語り手がこの場面に『憐れみの賛歌』を配置した効果は絶大であり、人々の悲慘が強く伝わってくる場所である。

そして語り手自身の生家と子供時代の思い出と思われる描写がある。六人の弟妹のせいで窮屈で、酷く細い道沿いの小さな家は酷く臭う (*petite maison qui sent très mauvais dans une rue très étroite (p.17)*)。一族全員が生まれてきた祖母のベッドの上には「御恵みを」(MERCI)の文字が書かれている。語り手の一族は全員がこの「御恵みを」の文字に見守られ、身籠もられこの世に生み出されてきたのだ。ここまで語り手は島とその地形、また島特有の強すぎる太陽を病気に擬えては軽蔑し、群衆の無関心に憤り、支配者によって植え付けられた価値観のために不安に陥る人々の悲慘を描いてきたが、語り手も間違いなくそれらの人々の同胞であり存在の根本に矛盾を抱えて生まれてきた一人なのだ。自身の生家を描くことによって語り手にはその自覚があることを明らかにしている。

Au bout du petit matin, le vent de jadis qui s'élève, des fidélités trahies, du devoir incertain qui se dérobe et cet autre petit matin d'Europe... (p.19)

夜が明けると、かつての風が立つ、裏切られた忠実の、怠った不確かな義務の風が、そしてヨーロッパのこのもうひとつの夜明け…

これまで語られた島や島民に対する憎しみ、苛立ち、軽蔑は決して他人事ではなく、同胞に向けられたものであり、ある種の近親憎悪であった。そして語り手は自分自身同じ出自を持ちながら、同胞たちを高めから見下ろしていた。高みに立つ存在である語り手は、自らの幼年時代の記憶によって出自からの孤立と現在の自身の存在の矛盾に気付くこととなる。彼にはこの矛盾を解くため同胞に対して果たすべき義務があると考え。その義務とは自らと同胞のあるべき姿を明白にすることであるが、それが何なのか、そのために何をすべきなのかはまだ明らかになっていない。語り手はこの「不確かな義務」を果たすべく、第二部に至り思索を巡らすことになるのである。

2. 内観、集会的意識の口を借りて語る

第二部は、第33節の「出発する／ハイエナー人間がいるので豹人間がいるので、おれはユダヤ人間になろう／カフィール人間／コルカタのーヒンドゥー人間に／投票ーしないーハーレムのー人間に」*« Partir. / Comme il y a des hommes-hyènes et des hommes-panthères, je serais un homme-juif / un homme-cafre / un homme-hindou-de-Calcutta / un homme-de-Harlem-qui-ne-vote-pas »* (p.19)から、109節の「先祖伝来の熱気と恐怖の生暖かい夜明け／海に投げ捨てよ、渡来物の俺の富を／海に投げ捨てよ、正真正銘の俺の欺瞞を」*« Tiède petit matin de chaleurs et de peurs ancestrales / par-dessus bord mes richesses pérégrines / par-dessus bord mes faussetés authentiques »* (p.40) までである。

第二部は、語り手が自分とは異なる存在に姿を変え、それらの名で様々な事

柄を語っているのが大きな特徴である。第二部冒頭で語り手ははじめてマルティニーク島の外へ目を向け、詩に空間的な広がり生まれる。

前掲33節におけるハイエナや豹について、アビオラ・イレレはトーテミズムの影響を指摘している⁹⁾。つまり、語り手である「おれ」は先祖の信仰に倣って、自らの内部に様々な存在を憑依させ一時的に同一化しようとしているのである。「おれ」が成り変わる対象としてユダヤ人、カフィル（アラビア語で異教徒を指す）、ヒンドゥー教徒、投票しない（法的にできない）合衆国のハーレムの黒人といった、差別を受けている存在を挙げていることは興味深い。それにより、語り手は、弱者、虐げられた者の側にたつという姿勢を打ち出そうとしていると考えられるのである。同一化は強い繋がり意志であり、引用箇所以降も「おれ」は様々な同一化を試みている。

「おれ」はボルドー、ナント、リヴァプール、ニューヨーク、サンフランシスコと地名を挙げ、「おれの指紋の付いていないところなどこの世界にはありはしない」と語る。セゼールはフランス本国に留学しハーレム・ルネッサンスに関する論文を書いたが、年譜やそれら個人的事実を考慮したとしてもコルカタや合衆国のハーレム、ボルドー、ナント、リヴァプール、ニューヨーク、サンフランシスコといった「場所」は必ずしも詩人が訪れたことのある土地ではなく、むしろ実際に訪れたことのない土地のほうが多いだろう。語り手は想像の中でこの世界のあらゆるところに立ち、様々な抑圧状況にある人々と同一化する。セゼールのイマジネーションの冒険はさらに時間を遡り、必ずしも確かなものではない先祖からの集合的記憶を想像世界に再現してみせる。上記の地名はどれも奴隷貿易に貢献した港湾都市であり、「おれ」の先祖たちやその生産物が売り買いされた場所である。地名を挙げることによって「おれ」は過去の黒人奴隷全体との同一化を果たしているといえよう。第二部の冒頭にみられた空間的な広がり、ここで時間的な広がりへと転換される。そしてこれ以降は歴史の流れの中での同一化について語られることになる。

まずはトゥーサン・ルーヴェルチュールが登場する。18世紀末にハイチで蜂起し、黒人による革命を成功させながらもナポレオン軍に捕らえられ、フラン

ス本国のジュラ山脈に幽閉され獄死した彼について、その小さな独房を「おれ」のものだったと語っているのだ。

さらに時間は遡る。「コンゴのことを考えることによっておれはコンゴになる à force de penser au Congo / je suis devenu un Congo (p.26)」。「コンゴになる」ということは空間的には新大陸を離れアフリカ大陸へと移動している。同時にまた時間的には捕囚以前へと遡っている。また語り手は想像することによって「暴れ馬 chevaux fous (p.20)」になり、「瑞々しい子供 enfants frais (p.20)」になり、「夜間外出禁止令 couvre-feu (p.20)」となり、「神殿遺跡 vestiges de temple (p.20)」となり、「輝石 pierres précieuses (p.20)」となる。イマジネーションの冒険によって「おれ」はアフリカの生物や無生物にさえなり遂げたのだ。

一方で、語り手「おれ」は第一部で提示された「義務の問題」についてより具体的に言及している。

Je viendrais à ce pays mien et je lui dirais : « Embrassez-moi sans crainte... Et si je ne sais que parler, c'est pour vous que je parlerai ».

Et je lui dirais encore : / « Ma bouche sera la bouche des malheurs qui n'ont point de bouche, ma voix, la liberté de celles qui s'affaissent au cachot du désespoir. » (p.21)

おれはおれのものであるこの土地に帰り、そして言うだろう。「恐れずに私を抱きしめてください…そして私には語ることしかできないけれど、私が語ろうとするのはあなたのためなのです」

そしておれはさらに言うだろう。「私の口は、口を持たぬ不幸の口となるでしょう、私の声は、絶望の牢獄で打ち沈む諸々の声の解放になるでしょう」

「おれのものであるこの土地」(ce pays miens) が、マルティニーク島を指すことは明らかであろう。島を擬人化し、「抱きしめてください」と呼びかける語り手の言葉には、驚くほど素直な郷里への愛が感じられる。「私が語ろうとするのはあなたのためなのです」と、語り手は、これまで誰からも見向きをされなかったこの島と、そこに住む人々のために語る決意を表明する。言葉をもたぬ人々に代わり、彼らの不幸について語ることで、絶望的な状況を切り開こうと

しているのである。島や島民の名で語ることができたときに、島は語り手にとっての紛う事なき祖国となり、語り手は島民の真の同胞となるであろう。

第一部において語り手は島民たちに対する非難や憤りを感じていた。すなわち自分自身の存在の矛盾が頭の片隅にありながらも、自身と島民を積極的に同一化させることはなかった。しかし、第二部では、語り手は差別されている者たちや、過去の黒人奴隷や、英雄トゥーサン・ルーヴェルチュールや、アフリカの大地に積極的に同一化している。第二部におけるイマジネーションの冒険は、島とのより高次の同一化を試みるための長い準備の過程であったといえるだろう。次の段階に進むために語り手は島のために語らなくてはならない。何を語るべきかについて述べられているのが、第三部である。

3. 第三部 (第 110 節から第 174 節まで) — 今語られるべきこと

第三部は、第 110 節の「しかし、なんと不思議な誇りがおれを突然照らし出すのか」*« Mais quel étrange orgueil tout soudain m'illumine ? »* (p.40) から詩の最終節である第 174 節の「昇れ、空を舐める者よ／そして過ぎし月おれが溺れてしまおうと思った大きな黒い穴まさにそこで今おれは夜の禍々しい舌を釣ろうと望むそこにはその動かぬ転回」*« monte lécheur de ciel / et le grand trou noir où je voulais me noyer l'autre lune c'est là que je veux pêcher maintenant la langue maléfique de la nuit en son immobile verrition ! »* (p.58) までである。

第 139 節で、語り手は、「存在者たちよ、おれはお前たちの背中越しに世界と平和を結んだりしない *Présences je ne ferai pas avec le monde ma paix sur votre dos.* (p.48)」と、「存在者」に呼びかける。「存在者」とは一体何だろう。その定義と思われるものが、第二部の終わり近く、第 108 節にある。

Ceux qui n'ont inventé ni la poudre ni la boussole
ceux qui n'ont jamais su dompter la vapeur ni l'électricité
ceux qui n'ont exploré ni les mers ni le ciel
mais ils savent en ses moindres recoins le pays de souffrance

ceux qui n'ont connu de voyages que de déracinements
 ceux qui se sont assouplis aux agenouillements
 ceux qu'on domestiqua et christianisa
 ceux qu'on inocula d'abâtardissement (p.40)
 火薬も羅針盤も発明しなかった者たち
 蒸気も電気も一度として飼い慣らせなかった者たち
 海も空も探検しなかった者たち
 だが彼らはそのすみずみまで苦難の土地を知っている
 故郷喪失の旅しか知らなかった者たち
 跪くことに慣れた者たち
 家畜化されキリスト教化された者たち
 退化を接種された者たち

「存在者」とは、語り手の同胞たるマルティニークの黒人であり、語り手は彼らと正面から向き合い、高次の同一化を実現しようとしている。

「ヨーロッパに平身低頭し、肌の色は太陽のせいだと述べ自分を人間扱いしてくれと懇願する黒人」、「ニグロの女衞」、「ニグロの土民兵」、「自分たちの縞を洗い落とそうとするシマウマの卑劣さ」が並ぶ中、語り手はただ古い隷属的思考を捨て去ったことに「万歳！ hurrah！（p.53）」と言う。「立て／そうすれば／自由だ *debout / et / libre* (p.55)」と言う。

また島々を船に見立て、風に呼びかける。「猛り狂うわれわれに至るまでおれを抱きしめよ／抱きしめよ、われわれを抱きしめろ *embrasse-moi jusqu'au nous furieux / embrasse, embrasse-NOUS* (p.57)」。第二部で祖国 (*ce pays mien*) に対して「抱きしめてください」と述べたとき、語り手は土地に「あなた (*vous*)」で語りかけていたが、ここでは風に「お前 (*tu*)」で語りかけている。それとともに、語り手の一人称は「おれ (*je*)」から「われわれ (*nous*)」へと移行する。風が抱きしめるのは、ひとりの「おれ」ではなく、「われわれ」なのである。つまり、この一節は、全ての同胞が「おれ」と同じように「万歳！」と言い、自由のために立つことを願った場面であり、第一部では憎悪の対象でしかなかった

島民が真の同胞となり和解が成された状態を思い描いていると考えられる。その上で島に対して、紛う事なき自分の祖国となるよう求めているのである。

第二部では語り手はイメージーションの冒険を成し遂げて新しい意識を自分の中へ取り込んだが、第三部の最終部は呼びかけの言葉や上昇のイメージが支配的である。しかし、その呼びかけや上昇は、未だ成し遂げられざる様子を残している。呼びかけの言葉は応答を待つものであり、なかなか返ってこない応答に対して呼びかけの言葉は次第に強く繰り返されている。「昇れ」(monte) という呼びかけを繰り返したまま詩はその終わりへ向かっているが、決して幕を閉ざそうとはしていない。

結論

『帰郷ノート』の第一部において語り手である「おれ」は島を憎み島民の無関心に憤りを示している。しかしそれが近親憎悪的な拒絶であることも確かであり、語り手は出自からの孤立を自覚している。第二部において語り手は島を出てあらゆる場所、また過去の様々な時間について思い描くことによって、様々な存在と同一化を遂げる。この一連の同一化は自分の存在が不当なものではないという確認であり、自立のための過程である。また第三部において真の同胞を見出すための冒険でもあった。第三部は自立の実践とともに、かつて憎しみ対象であった者たちと自立の意志の共有を試み、憎しみの対象であった島や島民との和解、そして高次元での同一化の可能性を探る流れとなっている。

使用テキスト

Aimé Césaire, « Cahier d'un retour au pay natal » in *La Poésie*, Éditions du Seuil, 2006.

注

- (1) 1635年にフランス人が入植を開始。黒人奴隷を導入したサトウキビの大農場経営による収益が本国の経済を大いに支えた。仏領における奴隷制度は1848年に廃止。第

- 二次大戦後、エメ・セゼールの尽力により植民地から海外県となり自治権の拡大を得た。
- (2) 『トロピック』誌は1941年から1945年までに14号刊行された。執筆者はセゼールのほか、妻シュザンヌ・セゼール、ルネ・メニルなど。
 - (3) 1945年から1993年までマルティニーク選出の国民議会議員、1945年から2001年までフォーール・ド・フランス市長を務めた。
 - (4) 詳細はエメ・セゼール『帰郷ノート | 植民地主義論』、砂野幸稔訳の訳注に述べられている。またジェイムズ・クリフォードも『文化の窮状』収録「新語のポリティクス」においてこのトピックを中心にセゼールの詩学について論じている。
 - (5) Dominique Combe, *Aimé Césaire : "Cahier d'un retour au pays natal"*, PUF, 1993.
 - (6) A・イレレは節ごとに番号を振り節単位での分析を行っている。イレレの節区切りによると『帰郷ノート』は全174節からなる。本論ではこの形式的な節区切りを採用する。cf. Abiola Irele, *Cahier d'un retour au pays natal Edited, with introduction, Commentary, and Notes, by Abiola Irele* (second edition), Ohio State University Press, 2000.
 - (7) ただし『帰郷ノート』においてアンティル諸島という言葉は3回使われているが、Martinique や martiniquais という語は一度も使われていない。
 - (8) サトウキビは植民地マルティニーク島の単一作物であり、現在もそれを原料とするラム酒の製造と消費が盛んである。
 - (9) Abiola Irele, *op. cit.*, p.60.

参考文献

- Dominique Combe, *Aimé Césaire - Cahier d'un retour au pays natal*, PUF, 1993
- Abiola Irele, *Cahier d'un retour au pays natal Edited, with introduction, Commentary, and Notes, by Abiola Irele second edition*, Ohio State University Press, 2000
- Clayton Eshleman and Annette Smith, *AIMÉ CÉSAIRE: THE COLLECTED POETRY*, University of California Press, 1984
- Maryse Condé, *Cahier d'un retour au pays natal : analyse critique*, Hatier, 1978
- エメ・セゼール『帰郷ノート | 植民地主義論』、砂野幸稔訳、平凡社、1997年
- ジェイムズ・クリフォード『文化の窮状—二十世紀の民族誌、文学、芸術』、太田好信、慶田勝彦、清水展、浜本満、古谷嘉章、星埜守之共訳、人文書院、2003年